

IAMAS 2020

情報科学芸術大学院大学 第18期生修了研究発表会・プロジェクト研究発表会



ご挨拶

このたび、IAMAS（イアマス）は「IAMAS 2020」と題して、第18期生による修了研究発表会および2019年度のプロジェクト研究発表会を開催します。IAMASでは、芸術、情報科学、デザインに留まらない様々な専門領域を持つ人が集まっています。このような環境の中で、各々の専門性を発揮しつつ、時には他の領域に跨りながら、自身の些細な違和感や関心に焦点を当てた制作や研究を行っています。その集大成として制作した修士研究作品の数々をここに発表します。

また、学生の修士研究作品発表と並んで、プロジェクト研究発表会を同時に開催します。プロジェクト研究では、教員と修士1年を中心とした学生による、様々な領域を包摂した研究成果を複数展示します。「IAMAS 2020」は学生の修了研究発表に併せて、本学の研究活動を同時にご覧頂ける、IAMAS全体の展覧会でもあります。

このようにして生まれた多種多様な分野の研究成果、並びに本学の活動をより多くの方に知っていただきたく、何卒本展の告知、ならびにご来場・ご取材のご検討をお願いいたします。

開催概要

- [日 時] 2020年2月21日(金) - 2月24日(月・祝)
10:00-18:00(初日のみ13:00から18:00まで) [入場無料]
- [会 場] ソフトピアジャパンセンタービル 岐阜県大垣市加賀野4丁目1番7号
- [公式情報] <https://www.iamas.ac.jp/exhibit20/>
- [主 催] 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

コンセプト

わたしにとってIAMAS(イアマス)は自己中心的な個の集合体です。

ここでは背景も専門もバラバラな学生が、それぞれのテーマを持ち研究に打ち込んでいます。テーマは誰かに与えられるものではなく、学生が自らの知性と感性に基づいた着眼点からこだわりを持って生み出したものです。それゆえに、研究で目指す表現にひとつとして同じものはありません。しかし、それぞれの表現は異なるものの、その間に共通する『引っ掛かり』の存在に気づくことがあります。そんな時、学生は互いの「おもしろい」や「大切だ」といった、まだ言語化できていない『引っ掛かり』について議論し、伝え合うための手段を模索します。そうしたやりとりの中で個は他者の視点の存在に自覚的になり、その形状は他の個と引かれあい形を変えます。ひとつひとつの個に同じものはなく、視点を引いて全体を見ると離れつつも細かな関わりを持つ集合体として成り立っています。

展覧会はわたしたちが研究を学校の外に向けて行う場です。作品に潜む「共通の感性」は、表現の触手となりその手を伸ばしています。それに触れた時、わたしたちとあなたとの間にも『引っ掛かり』が生まれ、集合体の関わりを感じられるはずで

IAMAS 2020 実行委員長 柴田一秀

IAMASとは

IAMAS(情報科学芸術大学院大学)は、岐阜県の情報産業拠点ソフトピアジャパンプロジェクトの一環として、1996年に岐阜県立国際情報科学芸術アカデミーとして開学し、2001年に修士課程のみの大学院大学として設立された学校です。充実した講師陣による少数定員の大学院大学として海外にも広く知られ、英文名称 Institute of Advanced Media Arts and Sciences からIAMAS(イアマス)と呼ばれています。芸術と科学の融合を建学の理念に掲げてスタートしたIAMASは、最新の科学技術や文化を吸収しながら、新しいものづくりやデザイン、先端的な芸術表現などを社会に還元する高度な表現者の育成を目指しています。IAMASの教育の先端性は、工学、デザイン、芸術、人文学など、様々な異なる分野の学生たちによるユニークな研究を生み出します。専門性を習得し、様々な知を統合し、それを新たな領域まで拡張することによって、修了後は表現者として社会における新しい領域で活動し、それを展開する能力を身につけます。

アクセス



広報に関するお問合せ

取材にお越しいただく際は、件名に「IAMAS 2020 取材申込」とご記入の上、事前に下記メールアドレスまでご連絡をお願いします。

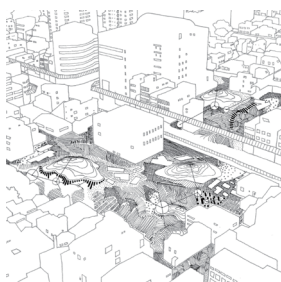
IAMAS事務局 MAIL: event@ml.iamas.ac.jp TEL: 0584-75-6600 FAX: 0584-75-6637

第18期修了研究発表者

安岐 理加 / 五十川 泰規 / 大竹 輝幸 / 大野 正俊 / カズヒデ / 佐々木 耀 /
 佐藤 優太郎 / 白石 覚也 / 杉山 一真 / 中田 航平 / 西本 昂生 / 林 毅 / 日比野 光紘 /
 伏田 昌弘 / 深尾 望 / 森田 了 / 小村 雅信 / 米澤 泰範 / 平塚 弥生

作品介绍

※IAMAS 2020で発表される作品の一部になります



『解体指向』第1巻「羽島市勤労青少年ホーム計画」/ 『解体指向』第2巻「笠松競馬場円城寺既舎計画」 五十川 泰規

作品は2冊の本である。

人口減少・都市縮減の時代において、建築の「解体」を手法とし、都市とコミュニティを再編集するための「解体デザイン」を定義するため、マニフェスト「解体指向」を示し、羽島市勤労青少年ホームと笠松競馬場円城寺既舎において、リサーチ、計画、実践を行い記述する。



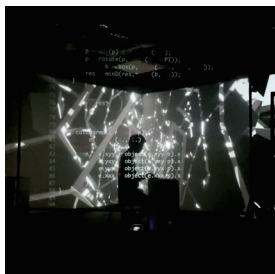
象眼撮影 カズヒデ

ファインダーをのぞいて目の前の景色から一部を切り取る撮影や、スマートフォンでのセルフィーなど、本来別々に存在している映像を撮影、編集、鑑賞する手法とその感覚。それらを混在させ、現在行われる撮影と相対的に異なる体験を探求するビデオインスタレーション。



交わる視線 / 重なる視線 佐々木 耀

映像の撮影舞台で視聴することを前提とする360度映像作品。小さな部屋内に設置された椅子に着席し、VR ヘッドセットを装着して同じ部屋内で撮影された映像を視聴する。複数の登場人物へと視点切り替わることによって、視聴者は「複数の他者」として物語を体験する。



光線のかなた 中田 航平

光の物理法則を実装・編集し映像を生成するビジュアルライブコーディングパフォーマンス。音楽的な要素を排除し、ライブで行われるコーディングという行為そのものを鑑賞者に提示する。本パフォーマンスの実演を通し、ライブパフォーマンスとしてのビジュアルライブコーディングの独立を目指す。



Sar/on rails 森田 了

Sar/on railsはインドネシアの民族音楽「ガムラン」の根底に存在する精神「ラサ」に着想を得た音楽作品である。

ガムランを演奏する際の「叩くと同時に一つ前の音を止める」という動作を反復することで生まれる、独特なフロー体験を一種のラサと捉え、このラサを最小限の動作・音楽の構成要素から得る。

プロジェクト研究発表

プロジェクトは修士研究を行う枠組みとしての役割を果たす重要な科目です。

メディア表現の社会的な意味をはかり、社会へ向けた成果の発信や外部との連携を強く意識し、領域横断的に運営されます。協働活動によって複数の領域のノウハウ、経験を効果的に統合し、より高度な研究成果、技術開発を目指すところにあります。また、広い視野と企画力、組織力、加えてアイデアを実現にまで導くマネジメント能力などを身につけることを目指します。「IAMAS 2020」では修士研究発表に加えて、これらプロジェクト研究の成果を展示します。

出展プロジェクト

Action Design Research Project / Archival Archotyping /
 移動体芸術、Critical Cycling / 体験拡張環境プロジェクト / タイムベースドメディア・プロジェクト /
 根尾コ・クリエイション / 福祉の技術プロジェクト

プロジェクト研究発表紹介

※IAMAS 2020で展示されるプロジェクトの一部となります



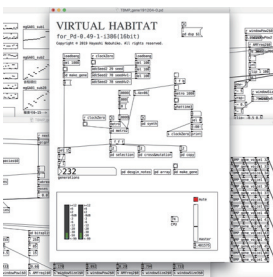
Action Design Research Project

これまで外部企業と協働で行なってきた、デジタルファブリケーションを活用したデザイン・プロセスを捉えなおす実践的研究について、「フィールドワーク・インタビュー」、「ワークショップ」、「プロトタイプングワークショップ」の3つの研究フェーズを空間的に構成した展示を行う。



Archival Archotyping

事物の空間構成をもとに、図と地の攪乱を意図して静物画を描き続けたイタリアの画家ジョルジョ・モランディ。その創造的活動の痕跡を学んだAIを「眼」として、鑑賞者自身の手で作品世界を再構築する体験型作品《モランディの部屋》のほか、今年度の研究成果数点を展示を行う。



タイムベースドメディア・プロジェクト

プロジェクトメンバーが取り組んだジェネラティブ・ストリーミング作品を展示する。あらかじめパッケージ化された映像や音響の再生ではなく、生成され続けるそれらをネットワーク配信する形式の作品をジェネラティブ・ストリーミング作品と呼ぶ。その他にこれまでの活動記録を展示する。



移動体芸術、Critical Cycling

移動体芸術は、自転車やドローンなどの移動する装置と移動する人を対象とするアート・プロジェクトである。移動することの意味について考え、新しい表現の可能性について研究している。2019年度は養老アート・ピクニック、中部山岳国立公園ARアプリ、ソフトピア・センタービル展示などを行った。

Critical Cyclingは、自転車に乗ることが発見的(ヒューリスティック)な批評に繋がるとして、2016年4月に発足した任意グループである。学生・教職員の他、学外からも賛同者を得て、国内外での自転車調査やWEBサイトでの研究発表などを行っている。

主なイベント(1/2)



写真:高橋希
photo:Nozomi Takahashi

ヴェネチアビエンナーレを終えて -協働プロジェクトを検証する-

ゲスト: 下道 基行 安野 太郎 服部 浩之

2019年5月11日から11月24日にかけて行われた「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」の日本館展示において開催された「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」展の参加作家である下道基行氏、安野太郎氏と、キュレーターの服部浩之氏をお迎えします。現地で展覧会を体験した三輪眞弘学長が聞き手となり、ヴェネチアでの体験談も交えながら、企画、設営、それぞれの作品についてお話をお伺いします。

下道 基行(したみち・もとゆき) SHITAMICHI Motoyuki

1978年、岡山県生まれ。2001年、武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。2015年、豊田市美術館ライブラリーにて、また2016年には黒部市美術館にて個展を開催。「光州ビエンナーレ2012」(韓国)、「Asian Art Biennial 2013」(台湾)、「あいちトリエンナーレ2013」、「岡山芸術交流2016」、「ESCAPE from the SEA」(マレーシア、2017)などグループ展への参加多数。光州ビエンナーレ2012ではNOON芸術賞(新人賞)を、2015年、さがみはら写真新人奨励賞を受賞。

服部 浩之(はっとり・ひろゆき) HATTORI Hiroyuki

1978年、愛知県生まれ。2006年、早稲田大学大学院修了(建築学)。
2009年-2016年、青森公立大学国際芸術センター青森[ACAC]学芸員。2017年より、秋田公立美術大学大学院准教授。アジアを中心に展覧会、リサーチ、プロジェクトなどを展開し、芸術と公共空間の関係を探求している。近年の企画に、「MEDIA/ART KITCHEN」(インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、日本(青森)、2013-2014)、「あいちトリエンナーレ2016」、「ESCAPE from the SEA」(マレーシア、2017)、「近くへの遠回り」(キューバ、2018)など多数。

安野 太郎(やすの・たろう) YASUNO Taro

1979年、東京都生まれ。2002年、東京音楽大学作曲専攻卒。2004年、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)修了。
現在、日本大学芸術学部、東京造形大学非常勤講師。2014年「死の舞踏」(京都芸術センター)、2017年「『大聖廟II』ーデッドパフォーマンス」(BankART)にてソロコンサートを開催。「ソニオペラ『死の舞踏』」(Festival/Tokyo15)、2017年「Radio Azja」(Teatr Powszechny, ポーランド)などフェスティバルへ多数参加。2013年 第7回JFC作曲賞第1位、2017年 清流の国びふ芸術祭 Art Award In the CUBE 2017 高橋源一郎賞、2018年 第10回創造する伝統賞を受賞。

映像の質感 ゲスト: 岩井 俊雄

過去約四半世紀、デジタルメディアとしての視覚情報とその表示デバイスをめぐる私たちの認識は変化してきました。特にスマートフォンが普及した現在、手の中のデバイスに表示される映像はその感触を変えてきているように思われます。90年代から00年代はじめまで先駆的なメディアアートを生み出し、一方近年は絵本作家として活躍する岩井俊雄氏をゲストに招き、映像の質感をキーワードにトークセッションを行います。

ゲストプロフィール : 1962年愛知県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科総合造形コース修了。在学中に『時間層II』で1985年第17回現代日本美術展大賞を最年少受賞。その後メディアアートの先駆者として、テレビ番組『ウゴウゴルーガ』、三鷹の森ジブリ美術館『トロピカルびんぼん』、ニンテンドーDS『エレクトロプラントクン』、ヤマハとの電子楽器『TENORI-ON』を始め、さまざまな作品を手がける。坂本龍一氏とのパフォーマンスでは、アルスエレクトロニカ・グランプリを受賞。近年は、娘のための手作りおもちゃをきっかけに絵本制作ワークショップにも力を入れ、絵本『100かいだてのいえ』はシリーズ累計発行部数300万部を超える。

バイオアートの手法 ゲスト: 長谷川 愛

IAMASの卒業生でありスペキュラティブデザインの手法を用いて制作を展開する長谷川愛氏と、今年度本学に赴任し、生命について、化学、合成生物学、ナノテクノロジーなどの分野を横断し制作を行うホアン・マニエル・カストロ准教授の対談。それぞれの活動から手法やモチベーションの共通点や相違点、そして今後のバイオ・アートという分野の展開について議論します。

ゲストプロフィール : アーティスト、デザイナー。バイオアートやスペキュラティブ・デザイン、デザイン・フィクション等の手法によって、テクノロジーと人がかかわる問題にコンセプトを置いた作品が多い。IAMAS卒業後渡英。2012年英国Royal College of ArtにてMA修士取得。2014年から2016年秋までMIT Media Labにて研究員、MS修士取得。2017年4月から東京大学 特任研究員。「(不)可能な子供/(im)possible baby」が第19回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。森美術館、アルスエレクトロニカ等、国内外で多数展示。



主なイベント (2/2)



修士1年有志企画展示

《修士1年有志企画展示》は、修士1年の中から4名の有志学生が作品を展示します。IAMASには、異なるバックグラウンドを持つ学生が入学します。多様性に満ちた環境の中で、日々、研究・制作活動をおこなっています。集まってきた学生は、それぞれの分野で違和感を抱き、修士研究を通じて新たな領域を模索しようとしています。本展示を、修士研究の折り返し地点と位置づけ、今後の研究を深めるための足がかりとして企画しました。



IAMAS OB/OGインタビュー ライブ

IAMAS OB/OGインタビューは、卒業生のユニークな活動や生き方を伝えていくWebメディアです。就職や仕事という点だけではなく、生きていく中で卒業生たちがイアマスで学んだ時間をどのように感じているのかを中心にインタビューを行っています。今回はインタビュー収録の様子をライブでお届けします。萩原健一氏、丸尾隆一氏、山城大督氏をお招きして「美ch」での活動を中心に平林教授がお聞きします。

主催：産業文化研究センター[RCIC]

産業文化研究センター[RCIC]は、IAMASの産官学連携、文化活動、広報活動を担うIAMASの附属機関である。



タイムベースドメディア・ガムランコンサート ゲスト：マルガサリ

タイムベースドメディア・プロジェクト主催によるガムランコンサート。ジャワガムラン・アンサブル「マルガサリ」をゲストに迎え、三輪眞弘学長によるガムラン現代曲、古典楽曲の演奏が行われる。IAMAS楽団の演奏も予定。

主催：タイムベースドメディア・プロジェクト

このプロジェクトでは時間芸術、すなわち時間的経過の中で行われる様々な「表現」に注目し、「装置を用いた表現」と伝統的な芸能の習得／実践双方を通して、その可能性に取り組む。それは「機械」と私たちの身体との関係をめぐる探求であり、さらにメディアと人間存在との関係性を問うことでもある。今期はインドネシアの伝統芸能「ガムラン」「ワヤン」に着目し、実践的にその理解を進めながら分析を行った。加えて、オンライン上の表現として、ジェネラティブ・ストリーミングの可能性を探った。

主なイベントスケジュール

2.21(金) 13:00-13:30 オープニングセレモニー

2.22(土) 14:00-15:30 バイオアートの手法

長谷川 愛 | アーティスト、デザイナー
ホアン・マヌエル・カストロ | 本学准教授
林 暢彦 | 本学修士一年

2.23(日) 14:00-15:30 映像の質感

岩井 俊雄 | 絵本作家、メディアアーティスト
クワクポリョウタ | 本学准教授
柴田 一秀 | 本学修士二年

2.24(月) 14:00-16:00 ヴェネチアビエンナーレを終えて

—協働プロジェクトを検証する—

下道 基行 | 美術家
服部 浩之 | キュレーター
安野 太郎 | 作曲家
三輪 眞弘 | 本学教授

2.24(月) 18:00-18:10 クロージングセレモニー

他、修了生・プロジェクトによるトークイベントやライブパフォーマンスなど開催予定です。